

全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ人・自然・文化

＜発行＞全国草原再生ネットワーク
<http://www.sogen-net.jp/>

ニュースレター

vol. 15

(Jul., 2013)



阿蘇の草原にたたずむ赤牛。牧歌的な風景をつくとともに、阿蘇の代表的な産物でもある（写真提供：公益財団法人阿蘇グリーンストック）

■全国草原再生ネットワーク 第7回総会の開催

全国草原再生ネットワーク第7回総会の開催

(事務局)

6月29日(土)、東京都の新橋において、第7回の役員会と総会が開催されました。また、総会の後には、各地からの話題提供が行われました。

<役員会>

総会に先立ち、理事、監事、および事務局スタッフによる役員会が開催されました。主な議題は、直後に行われる総会における議題の確認です。平成24年度の事業報告および決算報告、平成25年度の事業計画および予算について、それぞれの案が事務局より説明され、総会の議題が確認されました。

また、次回の全国草原サミットの候補地などについて、各役員者のネットワークを活用して、有力な場所をリサーチすることも確認されました。

<総会>

今回の総会の議題は、平成24年度事業報告、決算報告、平成25年度事業計画、予算案、そして役員改選の5つです。

事業報告、決算報告では、各事業の実施状況や課題などについて事務局より報告がありました。昨年度は、全国草原サミット・シンポジウムが開催された年であったため、そのサポートが大きな事業となりました。一方で、次回の開催地が決まっていないことが課題として報告されました。

事業計画および予算では、基本的には昨年度事業を継続することとしましたが、重点事項として、全国版ヒヤリ・ハット集作成のために情報収集を行う、次回の全国草原サミット・シンポジウム開催候補地を秋を目途に絞り込む、ことが承認されました。

役員改選では、現理事は全員留任すること、新たな理事として横田潤一郎氏が加わることが承認されました。また、事務局についても、各種事業の充実と関東方面の情報収集のため、事務局スタッフを新たに加えることで承認されました。

<各地からの報告>

まず、阿蘇グリーンストックの山内氏より、阿蘇で作成された「ヒヤリ・ハット集」の紹介がありました。以前からその必要性は指摘されていたが、昨年起こった事故をきっかけに、今後の安全確保の資料とするために、作成されたとのこと。火入れや防火帯刈りの参加者が危険を感じた場面を、絵と文でわかりやすくまとめられています。私たちが見ても非常に参考になる事例が多くありました。

その他には、横田潤一郎氏、横田弘子氏、増井大樹氏から東北地方などの草原について、白川勝信氏から北広島町のせど山再生事業について、亀成川を愛する会の小山氏より「そうけっばら」の保護活動の状況について報告がありました。東北地方の草原は、これまであまり知られていない場所に、広い面積の草原が残っていることがわかりました。せど山とは裏山の方言とのことですが、地域で資源とお金を循環させる仕組みが参考になりました。そうけっばらは、開発事業が再開されるとのことで、署名活動などの呼びかけが行われています。

いずれの話題も大変興味深いもので、総会の時間だけでなく、その後の懇談会でも、有意義な情報交換ができたようでした。



エクスカージョン報告：菅生沼見学に参加して

(平舘俊太郎：独立行政法人農業環境技術研究所（茨城県つくば市）)

2013年6月28日（金曜日）、菅生沼（すがおぬま）の見学会に参加しました。当日は、梅雨にもかかわらず青空が広がる好天で、12:30につくばエクスプレス守谷駅に集合したあと、車に分乗し、30分ほどで菅生沼近くの駐車場に到着しました。菅生沼は、茨城県南西部の坂東市と常総市にまたがる広さ約230haの湿地で、そこで育まれている自然の重要性から、茨城県条例によって自然環境保全地域に指定されています。

駐車場から小高い土手を登ると、菅生沼とそこから流れ出る飯沼川が一望できました。後ほど地図で確認すると、菅生沼は利根川と鬼怒川の合流点から上流側に7kmほどの場所に位置しており、規模の大きな氾濫原であることがわかりました。かつては、利根川の増水時にこの地域に利根川の水が流れ込み住民を苦しめたとのことですが、利根川の逆流を止める水門が1956年に完成し、またこの地域の排水事業も進んだことから、現在では水の動きは安定しているようです。

土手から菅生沼側に降りると、しっかりした金属製の管理道が整備してあり、そこを歩きながら菅生沼の植物たちを間近に観察することができました（写真1参照）。また、歩道から1段下がった地面にも案内していただき、ヨシが生育する草原内の植物たちを観察しました。菅生沼は、とくにタチスミレ（絶滅危惧Ⅱ類）が生育する場所として重要ですが、今回のエクスカージョンでも草



写真1 管理道からみた菅生沼



写真2
ハナムグラ



写真3
シロバナタカアザミ



写真4
ヌマトラノオ



写真5
ハンゲショウ

原内でしっかりタチスミレを観察することができました。残念ながらタチスミレの花期は終わっていましたが、ハナムグラ（写真2）、シロバナタカアザミ（写真3）、ヌマトラノオ（写真4）、ハンゲショウ（写真5）は、花を観察することができました。

菅生沼では、かつては水草を採って緑肥にする「もくとり」や湿地に生育する草を資源として利用していましたが、これらに対する需要が激減した現在では、人の手による管理が行き届かなくなり、湿地の陸化やヤナギ等の樹木の侵入などにより徐々にその姿を変え、タチスミレたちも生育の場を失いつつあるようです。このため、タチスミレを保全するため活動が菅生沼でも10年ほど前から始まったとのことでした。とくに、野焼きはタチスミレの個体数を増やす効果が高いことが、配布された資料に説明されていました。ただし、野焼きには延焼の危険が伴

うこと、地元住民の理解が必要であること、多くの人手が必要であることなど、いくつかのハードルをクリアしなければなりません。菅生沼でも、これらの問題を抱えているとのことでした。

菅生沼の草原は、希少な植物に対して生育の場を提供している一方で、実は多くの侵略的外来植物の蔓延を許してしまっている一面も見られました。写真1は、一見きれいな草原ですが、よく見ると要注意外来生物であるオオブタクサがもうすぐでヨシの草丈を超えそうな勢いです。また、写真3のシロバナタカアザミも、オオブタクサに囲まれて息苦しそうです。菅生沼の遊歩道の入り口では、特定外来生物に指定されているアレチウリが大威張りでした（写真6）。これ以外にも、セイタカアワダチソウやキショウブといった要注意外来生物も見られました。これらの侵略的外来植物は、富栄養的な環境を求めて菅生沼に生育しているのではないかと思いましたが、詳しいことは、今後調査する必要があると思いました。

今回は、菅生沼の見学会に参加して、その自然に触れることができた反面、その保全に向けた問題も学ぶことができました。つまり、保全のために必要な活動をいかに継続するかという問題と、外来植物問題です。こういった問題は、日本全国で共通しているようです。いずれも私たちの生活と深い関わりがある問題だけに、より多くの人たちに関心を持ってもらい、解決に向けて考えていければと思います。



写真6 アレチウリ

なお、本稿を執筆するに当たり、下記の資料を参考にさせていただきました。

- ・小幡和男、「火入れがタチスミレを救う」
(http://www.green.gifu-u.ac.jp/~tsuda/noyaki/SGO_saveviola.pdf)

- ・平成 25 年度自然観察会「タチスミレを観察しよう」配布資料（茨城県自然博物館）

また、この菅生沼見学会への参加者は 12 名でした。最後に、今回の見学会で実際に菅生沼を案内してくださった茨城県自然博物館の宮本卓也さん、森林塾青水の増井太樹さん、この見学会を開催していただきました緑と水の連絡会議事務局のみなさまに感謝いたします。有意義な見学会をありがとうございました。

エクスカーション報告：筑波の茅葺民家見学に参加して

（横田弘子：神奈川県在住）

エクスカーションの後半は、八郷（やさと）の茅葺民家見学に向かいました。日本茅葺き文化協会の上野弥智代さんに案内していただきました。

筑波山を臨む石岡市八郷地区には、70 軒ほどの茅葺民家が残っています。トタンを被せておらず、現在も居住中という現役の民家がほとんどで、観光地化していない点がかえって新鮮に感じられます。茅葺きの集落を一望できるわけではなく、屋敷林にひっそり囲まれて点在していることも、有名になりすぎずに保たれてきた一因かもしれません。

平成 16 年に、八郷の茅葺き民家を後世に伝える為、やさと茅葺き屋根保存会が立ち上がりました。保存会では、見学会や交流会の他、茅の確保も行っ



a. 木崎さん邸の四足門



b. 木崎さん邸の母屋（右）と書院（左）



c. 屋根の軒先の茅は 8 層にもなる



d. 木崎さん邸の棟飾り「寿」

ており、最近ではつくば市の高エネルギー加速器研究機構敷地内で茅刈りを行っています。

八郷は古くから豊かな地域で、多くの家が 500 坪以上という日本トップクラスの敷地面積を持っています。各家に母屋、書院（隠居屋）、納屋、蔵、長屋門などが揃っており、どこも豪邸に見えて参加者は車中でもキョロキョロ。

まずは木崎さん邸にお伺いしました。波紋様の立派な四つ足門（写真 a）をくぐると、池と藤棚を囲んで茅葺きの母屋・書院があり、その配置からか、包まれるような感覚を覚えます（写真 b）。

江戸後期に建てられたという母屋・書院は、この地方独特の装飾性の高い茅葺き屋根を持ちます。特に軒先の「トオシモノ」と呼ばれる縞模様になった茅の層が見事です（写真 c）。最も内側の白い層は稲わらで、その上に新しい茅と煤けた古い茅を交互に並べて縞模様にします。それぞれの層の間には薄く杉皮が挟まれています。屋根の一番表層を「ミズギリ」といい、葺き替えるのはほとんどこの層だけです。大きくラウンドした屋根の隅の曲線美も見逃せません。曲線部分にだけ、細い竹の小口の飾りが並んで見えています。

屋根の上の棟飾りは「キリトビ」と呼ばれ、刈り込んだ上に墨などで文字や絵が描かれます。お客さんから見える箇所には「寿」が多く、その反対側には「水」や「龍」など火避けの意味を込めたものが多いとのことでした（写真 d）。

納屋の奥には柱と屋根だけの簡素な「木小屋」がありました。薪などを保管するものらしいですが、今は葺き替え用の茅が保管されていました。当主が近くから刈り取って来た茅の他、保存会から分配された茅が保管されています。

2 軒目は大場さん邸にお伺いしました。ご夫婦で茅葺きに誇りを持って、手をかけお金をかけ、職人を育てながら茅葺き屋根を守られています。大場さんはぶどう園を経営されているのですが、茅葺きの母屋目当てにぶどう園に来られるお客さんもいるそうです。

母屋自体は築 200 年ほどで、屋根は葺き替えて 6 年目だといいます（写真 e）。

この辺りでは棟のことを「ぐし」と言い、屋根の上にちょんまげのような飾りが飛び出たものを「大名ぐし」と言います。通常は軒の四隅にだけ使われ



e. 大場さん邸の母屋



f. 竹の小口の白い飾りがずらり

る竹の小口の飾りを、ぐるりと1周使っているが贅沢なところ（写真 f）。この作業だけで、3人で3日半かかったそうです。篠竹は少し離れた竹山のものです、ご当主ご夫妻自ら取って来ては小口に白いペンキを塗るなどして、準備をされたとのことでした。

棟飾りの「キリトビ」は、竹の小口を彩色した松竹梅の図案です（写真 g）。



g. キリトビは松竹梅の模様

家の中に入れていただくと、松の梁が積まれるように交差していて、あまり見ないような重厚なものでした。梁が多いと掃除は大変だが、財力の証としてこだわって作られたものだったとのことでした（写真 h）。

写真 i の小屋は茅葺きが古く痛んでしまったので壊そうとしていたらしいのですが、保存会のワークショップで葺き替えが行われたそうです。これだけ簡素な茅葺き屋根でも坪あたり 5~6 ダン（軽トラック 1 台強）の茅を使っています。



h. 重厚に重なった梁

大場さんには、八郷の茅葺きの技術や、抱えている課題について、沢山のことを話していただきました。

八郷の茅葺き職人は技術が高くこだわりもあり、職人が多かった時代は秘密主義だったそうです。例えば、昼休みには屋根にゴザをかけ、葺き方が分からないよう隠したり、屋根飾りも別の場所で作って持参したりするぐらいだったと懐かしく語っておられました。

そして、茅選びも厳しいそうです。肥えていないところで育ち、長過ぎずスーっとした印象で、上に向かって広がらないのが良い茅。ちなみに悪い茅は「アバレガヤ」と呼びます。実は、筑波山沿いには比較的茅場があるらしいのですが、大場さんの集落では昔から茅場が不十分で、茅を道路沿いや川沿いで人目に付かないよう刈り取る「拾い茅」をした他、持ち主がいる茅場で了解を得て刈らせてもらうこともあったとのこと。小麦わら・稲わらを使うこともあったようです。だから、保存会の活動が始まったことで、とても楽になったと喜んでおられました。葺き替えで出た古い茅も、ぶどう園の肥料にするなど、少しでも無駄にしないようにしているそうです。

また、茅葺き屋根の保存にはどうしてもお金がかかってしまいますが、茅刈りや「こまるき」（束ねた茅をバラして小さくまとめ直すこと）、地走り（茅葺き職人のヘルプ役）をご夫婦のみずから行って守っていく努力をしておられます。八郷のこまるきは、茅の上下を組んで一束にしたり、長さをそろえたりする方法が細かく、難しいそうです。地走りも、職人と息を合わせるためには熟練が必要です。奥様は、他の土地から嫁いでこられたそうですが、茅刈りも



i. ワークショップで葺き替えられた小屋

こまるきも地走りも上手だそうです。

茅葺き職人を理解し支えてきた大場さんですが、最近の悩み事は・・・「職人の質が落ちてきて、心配だし寂しい。八郷には熟練の職人が3人しかおらず、懇意にしている職人には30代の若手弟子2人がいるが、技術はまだまだ。」軒のトオシモノはほとんど葺き換えないので、新築でもなければ若手職人が作れる機会がないことも原因のようです。

若い人が茅葺きを「贅沢だ」と言ってくれると本当にうれしいし、維持して来てよかったと思うと話しておられたのが印象的でした。

* * * * *

最後に、上野さんのお計らいで、もう1箇所見学にお伺いできることになりました。

つくば市北部の田井地区で、間近にそびえる筑波山を背景にした茅葺き家屋です(写真j)。2012年に「筑波山麓里山プロジェクト」が立ち上がり、筑波大学の学生や地域の人たちの手で、集落の古民家が移築再生されたものです。プロジェクトを指揮され



j. 裏手から。手前部分はバイオトイレ

た筑波大学名誉教授の安藤邦廣さんにも現地でご説明いただくことができました。

江戸終わり頃からのものだという民家を、少し小さくして移築したものだそうで、現在は地域で共有する農作業小屋などとして使われています。バイオトイレと薪ボイラーのシャワーが新しく併設されており、その屋根はカンゾウなど様々な植物を植えた芝屋根になっています。

茅を調達する過程で、たまたま隣の休耕田(写真k)にススキが沢山生えていたため、地主の了解を得て刈ることができたそうです。植生調査はしていないようですが、今回の参加者が簡単に確認したところ、チガヤやヨシ、ツリガネニンジンなどがありました。

明治頃に作成された迅速測図では、筑波山は山頂まで草原だったらしく、同じ時代の絵図にも麓から中腹にかけて茅葺き住宅が並んだ様子が描かれているようですが、大火で失って以降、戦後は小麦わらで葺いていたそうです。

安藤名誉教授にお話しいただいた、「筑波山周辺が関東における稲作・養蚕などの文化の始まりの地であり、いまここで様々な人たちが活発に行っている地域再生の取り組みが、また関東平野に発信され広がっていく」というロマンあるビジョンが印象的でした。

八郷には、歴史と文化の大きな流れがまだ息づいていて、それが地域の人に茅葺き文化を守らせ、また新しい人を呼び込んでいるのだと分かりました。この場所で茅場の調査研究が進めば、現代の理想的な草原と暮らしのあり方が描けるのではないだろうか、高い可能性を感じた八郷探訪でした。



k 奥の小高い部分にススキが生えている

■各地からの報告

阿蘇で草原再生のモニタリングを行っています

(横川昌史：大阪府在住)

半自然草原の価値が見直され、各地で草原再生が行われるようになってきました。かつて草原だった場所で草刈りや火入れなどの管理を再開したり、木を伐ったりしたら元の草原植生に戻るのでしょうか？実はこのような検証をした例はまだまだ少なく、きちんとしたデータに基づいた議論がしばらく状況にあります。熊本県阿蘇地方は日本でも最も広大な草原が残っている場所ですが、それでも植林や管理放棄によって過去数十年でかなり草原が減りました。阿蘇のとある場所の地主さんが、雑木林を伐って草原を再生したいとおっしゃっていたので、「これはチャンス！」と思い、2009年から4年間にわたって植生の変化をモニタリングさせてもらいました。

調査をさせてもらっている場所は、阿蘇の東外輪山と呼ばれる地域で阿蘇の中でも草原の減少が著しい場所です。今回、草原再生試験を行った場所は、拡大造林期の頃、草原にスギが植林され、1980年代中ごろにスギの伐採が行われています。スギの伐採

後は放棄されて、ミズキが多い雑木林へ遷移しましたが、2009年の秋に現在の地主さんが雑木林の伐採をしました。伐採予定地に2m×2mの調査枠をつくって、調査枠内の植物の種類とそれぞれの植物の量(被度)を測りました。

写真で見る限り、雑木林を伐採した翌年には草原のように見えますし、その後大きな変化がないように見えます(図1)。しかし、実際に調査区内の植物の様子は年々変わっています。例えば、草原再生のあと草原性植物の種数が増えました(図2A)。これは、雑木林を伐って明るい環境になったことで草原性植物が進入・定着してきていることを示しています。優占種(相対的に多い植物)の変化も見られました。2009年つまり伐採前の優占種は、ハガクレツリフネ、コアカソ、ミズヒキなど林床や林縁に生育する植物でした。2010年つまり伐採翌年と2011年の優占種はヌルデ、コアカソ、ヤマアザミになり、伐採跡地のような植生に変化しました。その後、



図1 草原再生試験区の植生の変化の様子

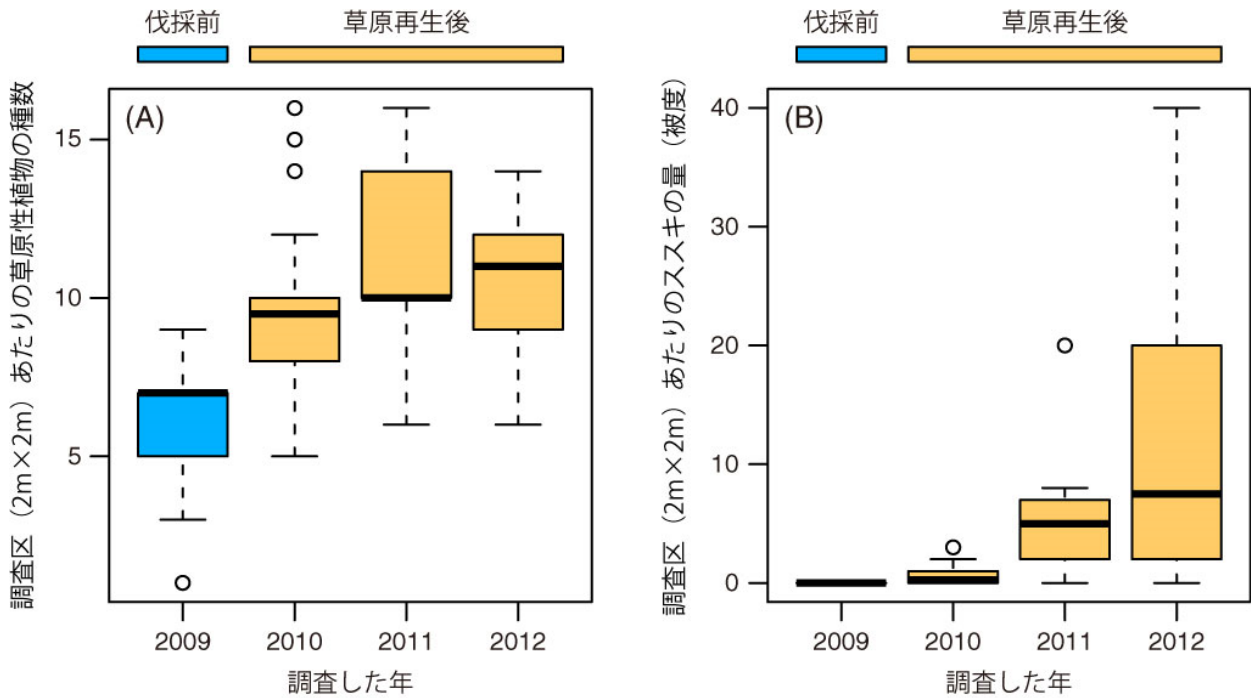


図2 (A) 草原再生試験区の草原性植物の種数と (B) ススキの量の変化
調査は各年の8月に行いました

2012年の優占種はヤマアザミ、コアカソ、セイタカアワダチソウ、ススキと変化し、ようやくススキが優占してきました。草原再生後のススキの変化を見てみると、順調に増えていることがわかります(図2B)。このように、今回調査をした場所では、雑木林を伐採して草原再生してもすぐには草原らしい植生には戻りませんでした。ススキが優占する草原に戻るにはまだ時間がかかりそうです。

草原再生がうまくいくかどうかを決める要因はいろいろ考えられます。周辺に種子の供給源となる草原が残っているかどうかは重要ですし、最近では石灰や肥料を投入した土壌だと外来植物が繁茂しやすいということもわかってきています。また、今回の場合は土地利用の履歴も重要そうです。今回の草原再生試験地の草原植生は、拡大造林期(1950年代)までさかのぼらなければなりません。植林と雑木林の期間が長かったために、草原再生の「元」と

なる草原性植物やその種子が調査地にほとんど残っていないと考えられます。これが、比較的最近に管理放棄された場所であれば細々と残っていた草原性植物や生き残っていた種子が再生の「元」になっていたかもしれません。このように草原再生の可否を握る要因はたくさんありそうですので、各地でたくさんの事例を集めて様々な要因を検討することが重要そうです。



モニタリング調査の様子

■「全国草原リレー」(第4回)

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第4回は、理事でもある山内氏らに、阿蘇の草原と取り組

みを紹介して頂きます。今回の執筆者が、次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

■千年以上の歴史を持つ阿蘇の草原■

(山内康二・桐原 章)

阿蘇の草原は、今から千年以上も前の平安時代から続いていると言われていています。(最近の地層の研究からは1万年以上とも言われている)

30~40年くらい前までは5万ha近くもあったと言われる阿蘇の草原も、年々減少を続け、現在では約22,000haの草原が、阿蘇郡市7ヶ市町村の約160の牧野組合および地区集落によって維持されています。



写真1 あか牛と草原

様々な面から見直されてきた草原の価値

これまで畜産の衰退と共に減少の一途をたどっていた阿蘇の草原の価値について、様々な面から見直されてきています。

ひとつは生物多様性の宝庫としての阿蘇の草原、草原の中に点在する湿地周辺の希少な湿地性動植物やヒゴタイなどに代表される大陸遺存植物など・・・

又、森林にも劣らない優れた水源涵養機能やCO₂の土中固定化能力などの公益的な価値。

さらには、最近全国ニュースにもなった世界農

業遺産認定や世界文化遺産登録申請中などでその重要性が再確認されている阿蘇の循環型農業と草原及び草原景観の価値など・・・

阿蘇草原再生協議会と千年委員会の取り組み

平成17年12月に約103の団体・個人によって設立された阿蘇草原再生協議会(会長高橋佳孝:草原再生ネット会長)はすでに240近い構成員の協議会となり、7,000万円を超える募金を集めた第I期草原再生募金(平成22年11月～



写真2 ヒゴタイ



写真3 ヤツシロソウ

25年3月)に続き、今年度から再度3年間で1億円を目標に第Ⅱ期募金に取り組むことになってきています。そして今年度は平成19年に協議会でまとめた「阿蘇草原再生全体構想」を新しい時代に合わせて見直していくことになっていきます。

さらに、熊本県知事や九州経済界のトップなどで構成される「阿蘇草原再生千年委員会」も、今年の8月からは恒久財源の具体化とこれ迄の熊本県内中心から福岡を含む北部九州全体の取り組みへと拡げていく千年委員会ステージⅡがスタートします。

また、これらの動きの中で、熊本県も知事の強い意向もあり「阿蘇の草原を守り、磨き上げ、次世代に継承するー減少トレンドから反転増加へー」とした「阿蘇草原再生ビジョン」をまとめ、取り組みが始まろうとしています。

こうした動きにもかかわらず、深刻さを増す阿蘇の草原の危機

昨年九州北部豪雨による被害や畜産農家の高齢化、後継者不足等により阿蘇草原の維持管理



写真4 千年委員会の様子

の困難さは、ますます厳しくなりつつあります。

一昨年の県の調査では160の牧野組合のうち約56%の組合がこのままでは10年後には野焼きが出来なくなると答われています。

今年数年のうちに従来の枠組にとらわれない抜本的な解決策が必要になってきていると思われます。

何か良い知恵があったら教えてください。

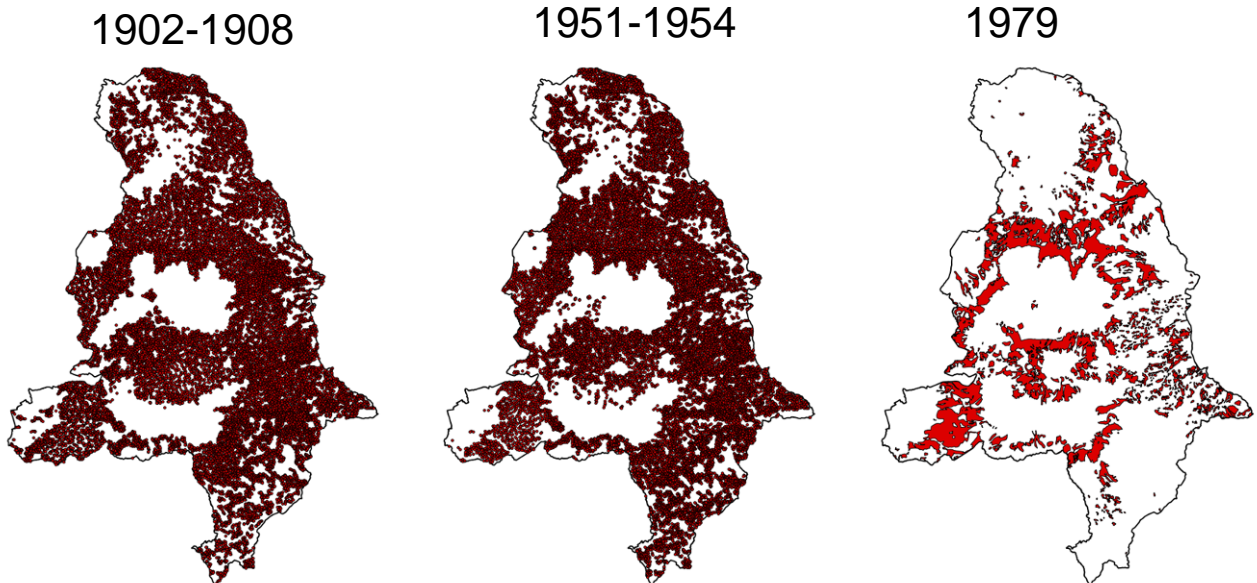


図1 草原の変遷 (西日本草原研究グループ未発表資料)

■草原をめぐる動き (2013年7月～10月)

- 7/7 草原の復元作業1(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局(秋吉台エコ・ミュージアム))
- 7/13 利根川の湖沼で学ぶー茨城県自然博物館編ー(場所:茨城県自然博物館、連絡先:森林塾青水)
- 7/13-14 茅葺き屋根葺き替えイベント(場所:滋賀県彦根市男鬼町、連絡先:滋賀県立大学人間文化学科 濱崎・石川研究室)
- 7/14 遊歩道にお花畑づくり(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局(秋吉台エコ・ミュージアム))
- 7/20 茅葺きワークショップ～ノベで葺け～(場所:世田谷区次大夫掘公園民家園、連絡先:世田谷区教育委員会民家園係)
- 7/21 秋吉台お花畑プロジェクト1～美しい秋吉台を守ろう!～(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局(秋吉台エコ・ミュージアム))
- 7/27-28 ススキ草原(元茅場)の防火帯整備と昆虫調査(場所:群馬県利根郡みなかみ町上ノ原、連絡先:森林塾青水)
- 7/28 大観峰募金キャンペーン(場所:熊本県阿蘇市大観峰、連絡先:阿蘇草原再生募金事務局)
- 7/31 多田さんと乙女を歩こう!(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 8/3 千町原夏の保全活動(場所:広島県山県郡北広島町、連絡先:西中国山地自然史研究会)
- 8/4 マルハナバチ調べ隊その2(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 8/7 草原学習指導者講習会～阿蘇の草原キッズを育てよう～:阿蘇谷編(場所:熊本県阿蘇市、連絡先:国立阿蘇青少年交流の家)
- 8/24-25 第2回茅葺きの里現地研修会(場所:岩手県一関市、連絡先:日本茅葺き文化協会)
- 8/25 遊歩道の杭づくり(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 8/25 草原学習指導者講習会:南郷谷編(場所:熊本県阿蘇市、連絡先:国立阿蘇青少年交流の家)
- 9/1 草刈りボランティアその2(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 9/8 マルハナバチ調べ隊その3(場所:山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先:乙女高原ファンクラブ)
- 9/28-29 ミズナラ林整備(場所:群馬県利根郡みなかみ町上の原、連絡先:森林塾青水)
- 9/29 草原の復元作業2～セイタカアワダチソウの駆除作業～(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局(秋吉台エコ・ミュージアム))
- 9/29 深入山の植物観察(場所:広島県安芸太田町深入山、連絡先:西中国山地自然史研究会)
- 10/12 秋吉台お花畑プロジェクト2(場所:山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局(秋吉台エコ・ミュージアム))
- 10/26-27 茅刈り講習・検定・秋の上ノ原散策(場所:群馬県利根郡みなかみ町上の原、連絡先:森林塾青水)
- ※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.15 2013年7月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】先日、総会が開催されましたが、早いもので第7回となりました。本年度の事業計画でもあげられていますが、阿蘇のヒヤリ・ハット集を参考に、全国版作成のための情報収集を行う予定にしています。みなさまから多くの情報が寄せられるほど、充実したヒヤリ・ハット集が作成できると思われれます。また、次回のサミットの候補地も探していることです。会員のみなさまからの情報提供をお待ちしております。